

私たちの敵

サタンの王国の構造

これは、「私たちの敵」というテーマの4つの連続する学びの最初です。今、イエスに献身しておられるすべての方が、敵に直面していることを認識しておられると信じます。なぜなら、力強く行動的な敵が自分に敵対しており、その直面している敵を警戒すらしめないことは、非常に危険な状況だからです。私たちが直面している敵は血肉のものではなく、目に見えない霊の存在です。私たちがこれらのテーマで取り扱う学びは、人間の感覚によって見分けるようなものではありません。聖書が言っている、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの」とは、目に見えない霊的なもののことです。これからお話することは、みことばを通してのみ理解できることです。聖書以外に信頼できる確実な情報はありません。

多くの人は、目に見える、触ることができる、聞こえる、味わうことができることが真の実体であると考えてるのではないのでしょうか。実は、歴史を通して哲学者たちは、そのようなものは、真の実体ではないとの結論に至りました。そのようなものは永久的ではなく、一時的なもので、ほとんどあてにならないものです。あなたは自分の感覚に頼ることはできません。歴史を通して、あまりにも多くの哲学者たちがその結論に至ったことは驚くべきことです。聖書も同じことを言っています。パウロは、見えるものは一時的であって、目に見えないものこそ、永遠のものであると言いました。つまり、感覚の世界のものは一時的なものにしか過ぎないのです。それらは、部分的に現実的なだけで、長続きしません。しかし、私たちが見ることのできない、私たちの感覚によって感じることもできない、霊的な世界のものこそ、真に実在のもので、そしてそれらは続いていくものです。

ですから、このようなテーマを取り扱う時、私たちは思いの調整をし、自分自身にこう言い聞かせなくてはなりません。「私は、見えるもの、触れることができるもの、聞こえるもの、味わうことのできるものに自分を制限せず、異なる世界のものに対して、聖霊を通してみことばで与えられる啓示に心と思いを開きます。」パウロは、エペソのクリスチャンたちのために、神が知恵と知識の啓示を与えてくださるように祈りました。今私は、私たちが知恵と知識の霊である神のことばに心を開くとき、神がその啓示を与えてくださるように祈ります。なぜなら、私たちは啓示によってのみ知ることができることを取り扱っているからです。

私たちが本質的に取り扱おうとしていることは、2つの王国、すなわち互いに敵対する2つの王国です。それらは、例えばスウェーデンやイギリス、また他の国々などのような実際にある国家ではなく、目に見えない霊的な王国です。一つは神の国、そしてもう一つはサタンの王国です。

マタイ12:26節と28節を読んで始めましょう。イエスは、パリサイ人たちから、イエスが悪霊のかしらベルゼブルの仲間だから悪霊を追い出すことができるのだと、非難されていました。そしてイエスは、それは非論理的な説明で、真実であり得ないと彼らに指摘しました。彼らに指摘したことはこの2つのことです。まず26節です。

「もし、サタンがサタンを追い出していて仲間割れしたのだったら、どうしてその国は立ち行くでしょう。」

そう、イエスご自身が示されているように、サタンは王国を持っています。多くのクリスチャンにとっては、それを理解することが困難であると私は気づきましたが、ここで明確に言われています。28節です。

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」

もう一つの王国、神の国があります。つまり、ここに2つの目に見えない神の国とサタンの王国という霊的な王国があるのです。そして、イエスはご自身のミニストリーに一つの特定の側面があることを示します。それは、その2つの王国を明るみに出し、ご自身の力と権威によって悪霊を追い出すことです。目に見えない霊的な存在である悪霊は、サタンの王国の代表です。イエスと、イエスのミニストリーに従う者たちは神の国の代表で、悪霊を追い出すときに神の国とサタンの王国の目に見える衝突が明るみに出されます。

また、イエスとそのしもべたちがサタンを追い出すことができるという事実は、神の国がサタンの王国よりも力強いという何よりの証拠です。個人的に私は、なぜサタンが解放のミニストリーを特に嫌い、敵対するのかは、それによって、サタンが秘密にしておきたいことが明るみに出されるから、またそれは、イエスの御国が自分の王国よりも力あるということの証拠であるからだと信じます。

では、サタンの王国の性質と構造についてお話します。エペソ 6:12 を開きましょう。その主となる節はこのことを明らかにしてくれると思います。また、あなたの五感では認識することのできないものについてお話しているということ念頭に置いていてください。エペソ 6:12 です。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

(英語に関する説明は不要のため省く)

リビング・バイブルでは、「戦う相手は、血や肉を持った人間ではなく、肉体のない者たちです。」となっています。これはとても鮮明だと私は思います。私たちが取り扱うものが、人格であることを理解することは非常に重要です。そのことを理解しない限り、私たちは目隠しされたボクサーのようです。私たちは人格を取り扱いますが、それは肉体のない人格で、霊的存在です。

続けましょう。「私たちの格闘」ですが、これは非常に激しい対立であることを私は指摘します。私は、人間同士の対決の中で、格闘技が最も激しいと考えます。一人がもう一人に真っ向から立ち向かいます。パウロがサタンの王国に対する私たちの戦いにこのフレーズを用いたのは、偶然ではありません。それは実に戦争なのです。「私たちの闘いは肉体を持った人間に対するものではありません。」ここで、私の訳です。「しかし、様々な領域と権威の上から下に向かう支配力の位に対するもの、今のこの暗闇の世界の制圧者に対するもの、空中にいる悪霊たちに対するものです。」私が言いたいことは、サタンの王国は混乱ではないということです。私が考えるに、それは非常に組織化された王国で、サタンは大規模の御使いたちの責任を持っていた天使長の一人にすぎなかったため、信用はなかったと思います。そのように、サタンは神からの組織的なシステムが与えられていました。サタンは神に反抗し、御使いたちを反抗に引きずり込み、神に対して単にそのシステムを用いたのです。ですから、サタンが高度な組織化された王国を持っていない

とは思いません。さっきも言いましたが、サタンには信用がありません。信頼は神にあります。しかし、サタンは間抜けではないという事実を考慮しましょう。サタンは全く抜け目がなく、強力で、凶悪な存在です。

では、私がみなさんに提供した改訂した訳で短く説明しましょう。「支配力の位に対し。」私が支配の位としたのは、ギリシャ語の単語は、抽象的だからです。最も現代的な翻訳では支配者となっていますが、それは支配者ではありません。サタンの王国において霊的権威の特定のレベルがあり、それは支配力のレベルです。そして、それら支配者のもとには様々な権限の領域の副支配者がいます。その副支配者の下にはさらに小さな権限の領域があります。ですから、一人の支配者は権威の主要な領域を持っており、その支配者の下位の支配者には、権限のより小さな領域の下位の支配者がいます。さらにその下に、さらに小さな権限の領域の支配者がいるのです。日本の会社で例えると、一人の部長がおり、その下に各課の課長がおり、さらにその下に各係長がいるという感じです。それが最初のイメージです。では旧約聖書を開いて、それがどのように機能しているか、非常にはっきりした例を見てみましょう。

「今のこの暗闇の世界の制圧者に対し」と言いました。私が故意に「制圧」という語を用いたのは、サタンの言葉からです。神は決して制圧しません。あなたは、背後にサタンがいる場所で制圧に出くわすのであり、サタンの野心、願望、戦略は、この世界全体を制圧するような立場に来ることです。しかし、サタンは暗闇のシステムでそれを制圧します。ご存知のように、神の国は光の王国で、サタンの王国は暗闇の王国です。神の国にいる人たちは、自分たちが仕えているお方を知っており、自分が何をしているのかをととても明確に理解しています。サタンの王国にいる人たちのほとんどは、自分たちが仕えているものの正体さえ知らず、実際自分たちが何をしているのかも知りません。

そして、その次のフレーズは、「空中にいる悪霊たちに対し」です。邪悪で強力、反抗的な霊の存在の全軍は「空中」と呼ばれる領域にいます。サタンが地獄にいるということは、教会で受け入れられてきた一種の伝統です。ほとんどの人はそのように考えます。それに対する私のコメントは、もし、サタンが地獄にいるのが真実であるなら、素晴らしいことであるけれど、事実は違うということです。そして、それを確証するみことばの保証はありません。それについてはあとでまたお話ししますが、サタンの王国がどのように存在するようになったかについて少し考えてみましょう。

イザヤ14章の数節を開きたいと思います。これらの箇所はルシファーと呼ばれる存在を取り扱っています。ルシファーという語は、ラテン語からきており、「光をもたらす者、輝く存在」という意味です。ヘブル語では *helel* という語で、「明けの明星」という意味です。どちらの形や名前を用いても、とにかくそれは、非常に明るい、輝く、栄光ある人を意味します。そして私自身、ルシファーは大天使と呼ばれたと信じます。

大天使の英語「archangel」の *arch* (アー) はギリシャ語が語源で、意味は「治める」です。ですから、大天使は、天使を治める者という意味で、他の天使たちを治める天使です。同じ単語は大司教にも見られます。大司教は他の司教たちを治める司教です。ここで私たちは、神の天の軍勢において主となる大天使の一人を思い浮かべます。彼の名はルシファーです。彼がそのように呼ばれたのは、彼は素晴らしく、美しかったからです。しかし、彼は悲しい過ちを犯しました。彼は自分の創り主に反抗し、自分を神と等しくしようとしたのです。

ルシファーとイエスを比較することは、とても興味深いです。ルシファーは造られた存在で、神と同じではありません。ルシファーは神と同等を求めて失敗しました。ピリピ2章で、イエスが言っていることを見てみましょう。口語訳で読みま

す。

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず」

キリストは神の主権により、神と等しい地位を持っておられました。しかし、キリストはご自身をへりくだらせ、神がキリストを高く上げられたのです。では、ここでイザヤ14:12の場面を見てみましょう。

「暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。」

ルシファーの反抗の動機が分かります。続く節でそのフレーズが出てきます。英語では、「私は～しよう。」というフレーズが5回出てきます。日本語で言うと5つの動詞です。「天に上る、王座を上げる、すわる、頂に上る、いと高さ方のようになろう。」被造物の意思が神のみこころに敵対したのです。鍵となる言葉は反抗です。

「あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高さ方のようになろう。』」

「いと高さ方」とは、全能の神です。そしてその単語の意味もまた、「私は神と等しくなる」です。

ですから、ルシファーの野心は、神と等しい地位に自分を高く上げることでした。彼は、自分で神のようになれるというほどに、とても頭がよく、美しく、自分の素晴らしさに動機付けられました。これは単なる私の個人的な意見ですが、彼は、手下の天使に反抗に関わるように動機づけたと考えます。これも私の想像に過ぎませんが、このようなことが天で続いていると想像してください。それはすべて天で始まりました。信じようが信じまいが、そうなのです。私は、ルシファーが自分の部下の天使たちを尋ねて回り、こう言います。「君は大変才能があるね。まれに見る才能だ。神は君が持っているすべてのものを評価してはいない。しかし、私が上司だとしたら、君にふさわしいポジションを与えるだろうに。」そして、明らかに、そして推論にすぎませんが、天使の三分の一の神への忠誠をむしばみました。彼の反抗と墮落を通して。そして神は言いました。「しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」

この同じ際立った存在についての別のイメージがわかるエゼキエル28章で何と言われているかを見てみましょう。エゼキエル28章は、2つに区分されます。それぞれは悲しみの声、あるいは宣言です。最初の部分はツロの君主へ2つ目の部分はツロの王へのものです。今はその時間はありませんが、その章を詳しく学ぶと、ツロの君主は人間であったことがわかります。たとえば彼が神であると宣言したとしても、人であることは明確に書かれています。一方、ツロの王は人間の存在でないという説明は非常に明らかです。そして、ここで私たちはサタンの王国がどのように機能しているかという興味深いイメージが理解できます。私たちにはツロの君主である人間の支配者がいますが、その背後の目に見えない領域には、サタンの支配者であるツロの王がいるのです。そして、ある意味、人間の支配者は自分の動きを指図する、目に見えない領域からの糸で動く操り人形以上の何ものでもありません。あなたがこの真理を理解し始めたなら、歴史と政治が非常に異なる意味合いを帯びてきます。歴史のいわゆる偉人たちの実に多くが行なってきたことは、単にサタンの王国の目に見えない糸によって動かされてきたサタンの操り人形が行なったことです。とにかく、この2つ目の存在、ツロの王について、みことばが何と言っているかを見てみましょう。エゼキエル28:12から

です。

「人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう仰せられる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。」

聖書の教師たちのかなり多くがサタンを信じています。そのサタンをルシファーと呼びましょう。彼は名前を変えてはいませんので。ルシファーは天の賛美楽団の責任者でした。サタンが今日、音楽についてよく知っており、人々を虜にする手段の一つとして音楽を用いるということを知ることは重要であると思います。続けて14節を見ましょう。

「わたしはあなたを油そそがれた守護者ケルブとともに、神の聖なる山に置いた。あなたは火の石の間を歩いていた。」

彼はなんと名誉的、光栄な地位についていたことでしょう。15節。

「あなたの行いは、あなたが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だった。」

ルシファーが造られた存在であり、神ではないことを神は彼に思い起こさせています。不正という言葉よりも、反抗という言葉の方がいいでしょう。16節。

「あなたの商いが繁盛すると・・・」

箴言で同じ語が、陰口をたたく者として使われています。商いとは貿易商で、貿易商は自分の商品を見せて売って回るので、その単語が使われています。しかし、その語が使われているのは、陰口をたたく者は陰口を言いふらして回るからです。それこそが、サタンが自分の部下の天使たちに、「見なさい。私とその地位に就いたら、君を正しく評価するだろう。私は君を昇進させよう。君は本当にふさわしい権限を得るだろう。」と言って回ったと、私が考える理由です。それは単に私の意見です。続けましょう。

「あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、あなたは罪を犯した。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出し、守護者ケルブが火の石の間からあなたを消えうせさせた。」

「そこで」に注目してください。「そこで」が差しているものは何でしょうか。反抗に対する神のさばきです。そして、サタン、あるいはルシファーの本当の動機が分かります。彼がサタンになるまで、ルシファーと呼ぶことにしましょう。17節です。

「あなたの心は自分の美しさに高ぶり、その輝きのために自分の知恵を腐らせた。」

ルシファーの最初の動機は何でしたか。最初の罪は何でしたか。高ぶりです。私たちはそのことを常に覚えておく必要があります。最初の罪は、地上ではなく、天で起こりました。それは酩酊でも、姦淫でも、嘘をつくことでもありませんでした。高ぶりだったのです。そして、私の言うことを信じてください。それはあらゆる罪の中で最も致命的で危険です。教会に通う多くの人は、姦淫や飲酒をしません、非常に簡単に高ぶりに誘惑され、それがどれほど危険であるかさえ気づいていないのです。

では、多くの人たちの頭の中にある質問を取り扱しましょう。「もし、サタンが天から追い出されたのなら、彼はどのようにいまも天上にいられるのですか。」です。答えは非常にシンプルです。一つ以上の天があるのです。「天」は複数形です。聖書の最初の節で天は、複数形で表わされています。「初めに、神が天と地を創られた。」地は単数形です。聖書をすべて調べると、天は複数形で表わされています。

2つの聖句を見てみましょう。第二コリント 12:2 で、パウロは超自然の領域の驚くべき体験をした人々について語っています。

「私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです、——第三の天にまで引き上げられました。」

私は伝道師になる前は、論理学者でした。そして、論理がまだ離れていなかった私の論理的思考は私に言いました。「もし、第三の天があるのなら、第一の天と第二の天があるはずだ。何事においても、第一と第二がなくて、第三はあり得ない。」そこで、パウロが言っているように、もし第三の天があるなら、少なくとも3つの天があるということです。天は複数形です。もう一つの聖句でそれを確かめましょう。エペソ 4:9 と 10 です。イエスの十字架での死とその復活と昇天の間に何が起こったかについて語っています。

「——この『上られた』ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです——」

「もろもろの天」というフレーズに気づきます。3つ以下のものに「もろもろ」という言葉を使うのは正しくありません。最低限3つあるということです。何年も前、私がケニアでアフリカ人教師のための大学の校長をしていたとき、一人の学生が私のところに来て言いました。「わたしの両親全員が私に会うために来ました。」そこで私は言いました。「君の言っている意味は分かるが、2つ、2人しかないなら、英語では「すべて」を使うことはできないので、そのように言うことはできないよ。3つ以上なければならぬんだよ。」ですから、パウロがイエスは、「もろもろの天よりも高く上られた」と言ったとき、それは最低でも3つ以上必要なのです。個人的には、私は天は全部で3つだと思います。これは私の個人的な意見です。あなたは、「私は第七の天にいた。」という人のことを聞いたことがあるかもしれません。みなさんがそのように使わない方がいいと考えます。それはイスラム教の聖典であるコーランから来ているフレーズであると私は理解しており、いかなる聖書的権威者も、3つ以上の天はないと考えています。もしあなたが、とても幸せに感じたとき、「雲にも昇るようだ。」と言うことには、特に問題はありません。聖書は多くの雲があることを示しています。

さて、一つの意見を提案しましょう。これは単に私にとっての確信です。あなたは信じなくても構いません。私に同

意しなくても、あなたは天国に行くことができます。しかし、私はこのパウロが知っていた人が上げられた第三の天とは、神の臨在、神の住まわれる天であったと信じます。そして、そこで彼は語るこのできないことばを聞いた、と言っています。まさしく、神ご自身のことばです。第一の天は私たちの目に見える天であると、私は信じたいです。そして第二の天は、第一と第三の間で、私たちの惑星と神が住まわれる天の間にもう一つの天があるはずですが、これは私の考えです。それを確証は聖書に多くあり、また私たちの経験においても確証があります。ですから、私たちと神の間にはサタンの王国があります。これは、私たちの人生で起こる物事と大いに関係があると、私は思います。

あなたは、「祈り通す」というフレーズを聞いたことがあるでしょう。何を祈り通すのでしょうか。私がまだ主を知らない者として主を求めていたとき、一時間祈ろうとしましたが、一言も言葉が出てきませんでした。私は真剣に求めていました。それから、どうにか打ち破りがありました。振り返ってみると、イエスと直接個人的な関係の中に入ろうとする私に、敵対する私はサタンの力を打ち破ったのだと信じます。それが私の生涯における転換期でした。ですから、「打ち破りの祈り」について話す伝統的なペンテコステ派の人を笑わないでください。彼らのやり方のいくつかは、少し型破りなところがあるかもしれませんが、真理がそこにあるのです。これは、私たちの霊的戦いの一部です。

短くいくつかの例を挙げますが、あなたと神の間に対立する王国があるということ、あなたが認識し始めると、あなたの霊的体験において、さらに多くの意味を成すと思います。そのことは、祈りについてあなたに教えてくれるでしょう。

これらの領域に非常に役立つ情報を含んでいるダニエル書を開きたいと思います。私が明らかにしようとしている支配者が描かれていると思われる、ダニエルの人生での出来事を取り上げたいと思います。ダニエル10章です。もし、あなたが興味をお持ちなら、この章を注意深く学ぶ必要がありますが、時間を節約するために、その章全体は読まず、簡単に背景を説明します。ダニエルが非常に成熟した信者であったある時、のちに「ダニエルの断食」と呼ばれるようになった3週間の断食をしました。彼はすべての食物を絶ったのではなく、非常にシンプルな基本的な食物だけを食べ、ぶどう酒も、贅沢な飲み物も飲みませんでした。リビング・バイブルには、「もちろん、茶菓も手にはありませんでした。」と言っています。ダニエルは、自分の民であるユダヤ人の将来を理解しようと、真剣に神を求めていたのです。そして3週間祈り、何も起こりませんでした。これが、私が言っていることの実例です。そして、素晴らしく力ある、神聖な存在が彼の祈りの答えを携えてやって来ました。その力強さは、この存在の臨在にダニエルと共にいた人々が震え上がって逃げるほどでした。ダニエルは、まさにヨハネがイエスの復活と昇天を目撃した後のように、からだの力を全く失っていました。そして、ダニエルは死人のように地に倒れました。しかし、この御使いは、ダニエルの祈りの答えを持ってやってきたのです。御使いは神から遣わされたのでした。

私が強調したいポイントは、ダニエルが祈り始めた最初の日、その御使いは遣わされました。しかし、御使いは3週間後まで到着しませんでした。なぜなら、神の御座からダニエルのいる地上まで行く途中でサタンの妨害に遭ったのです。御使いが遭った妨害は、人間からのものではありませんでした。人間という存在が、そのように御使いに抵抗することはできません。それは地上ではなく、神の天でもなく、神のいる天と地上の間のだこかの領域でした。私はサタンの王国の領域であったと考えます。つまり、御使いは、神が遣わしたメッセージを届けるために、サタンの王国を打ち破らなければならませんでした。そして、これは御使いが言っていることですが、「ペルシャの君」、もう一人は、「ペ

ルシャの王」、のちに「ギリシャの君」という特定の存在について語ろうとしています。そして、それらを見てみると、ひとりとして人間の存在ではないことがわかります。それらはみな御使いの存在で、ダニエルのもとへ来た御使いに敵対するために全力を尽くしたサタンの使いです。

スリルに満ちたことをお話ししましょう。ダニエルの祈りは、すべての天を動かしました。その祈りは、神の御使いを置くことになり、それが、敵対するサタンの使いを刺激しました。そして、ダニエルは最後まで祈らなければなりません。ダニエルは、答えを得るまでに21日間持ちこたえなければならなかったのです。ですから、みなさん、時に祈っていても、答えを得ることができないとき、それはあなたが間違ったことを祈っているからではないことがあります。実際、あなたは正しいことを祈っているけれども、妨害があるのです。そして、今話している中で見出したいことの一つは、どのようにその妨害に打ち勝つかです。どのように最後まで祈り通すか、どのように打ち破る祈りをするか、どのようにそれらの力に勝利するかです。

とにかく、御使いがダニエルに言っていることを見てください。ダニエル 10:12 です。

「彼は私に言った。『恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。』」
(ダニエルは、どのようにへりくだったのでしょうか。断食によってです。断食は私たち自身を神の前にへりくだらせる方法です。)

言い換えると、神はあなたが最初に祈った日に私を遣わした、です。なぜ御使いは到着しなかったのでしょうか。神の御座から地上への道のりが21日もかかったというのが理由ではありません。13節。

「『ペルシャの国の君が二十一日間、私に向かって立っていた・・・』」

ペルシャの国の君とはだれですか。どう考えてもサタンでしょう。ペルシャ帝国における神の意図に抵抗するために、サタンがペルシャ帝国の監督として使わしたサタンの使いです。

少し考えてみましょう。なぜこの時代にペルシャ帝国は重要だったのでしょうか。イスラエルの歴史を勉強すると、ユダヤ人が反抗によって神に背を向け、自分の土地から追放されたあと、ユダヤ人を支配した4つの連続した異邦人の帝国がありました。最初は彼らが捕囚となって行ったバビロンで、2番目はメド・ペルシャ、あるいはペルシャで、ダニエルの時代に力があつた国の一つでした。三番目はギリシャで、4番目はローマでした。ユダヤ人からのみメシヤ、救い主が起こるので、人類のためのすべての神の目的は、ユダヤ人に集中していました。そして、イスラエルに集中された神の目的のゆえに、サタンの妨害もまた、イスラエルに集中しました。つまり、あなたが神のご計画の中心にいる時、そこが最もサタンの妨害があるところなのです。それを心に留めておくことは重要です。

ですから、サタンがしたいことは、ユダヤ人、イスラエルを捕らわれの状態に置き、自分たちの土地に帰らせないようにしておくことでした。ダニエルが祈っていたのは、イスラエルが自分たちの土地に帰れるようにということでした。それで、このペルシャというサタンの王国の君は、ダニエルに逆らったのです。それから、御使いは続けて言います。

「『そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれた・・・』」

そう、この御使いは一人では打ち破ることができませんでした。これは実に興味深いシーンで、なぜミカエルは来たのでしょうか。大天使たちの間でのミカエルの特定の仕事は何ですか。ミカエルには、一つの重要な任務がありました。ダニエル12:1を少し見てみましょう。

「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。」

ダニエルの時代のあなたの国の人々とはだれのことですか。そう、ユダヤ人です。ですから、ミカエルが中心にいるときは常に、ユダヤ人が歴史の舞台の中心にいることは確かです。というのは、ミカエルの特定の任務は、みなさんをご存知の通り、何度もユダヤ人を滅ぼすためのサタンの攻撃からユダヤ人を守ることだからです。

ダニエル10章に戻りましょう。13節で御使いはこう言っています。

「私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき・・・」

ここでは、「王たち」と複数形になっています。私たちの通常の使い方に反して、「君」が最高支配者で、王たちは彼の下にいた、と私は思います。つまり、一人の君(王子)がおり、その下に多くの王がいたということです。それが、私が言った、「様々な領域の支配者が、権限の命令を下されていた。」ということです。

それらの王たちの仕事は何でしたか。神からのことばは何もありませんが、私が個人的に信じているのは、イギリスを例に挙げると、サタンはイギリスを支配する王子を持っていることを私は疑いません。私は決してそれを疑いません。その主要な王子の下に、おそらくイギリスの各主要都市を支配する下位の支配者がいます。巡回伝道師として、私は一つの都市に着くと、その町を覆うサタンの特定の力が何であるかを見分けようと、アンテナを張ることを経験によって学びました。そして、ペルシヤ王国には異なる様々な民族グループがおり、主要な各民族グループの上にサタンの力があつたと信じます。私が誰の気分も害することなく言うことができるとしたら、これは、非常に悲劇的なアメリカ・インディアン・ケースにおいて特に顕著であると思います。それは、アメリカにもたらされたあらゆる霊的、物質的祝福を、アメリカ・インディアンたちはほとんど味わうことができなかつたからです。そして、彼らは極端なほど魔術にはまっています。そして、アメリカ・インディアンを暗闇と束縛のもとにとどめる任務を任された特定のサタンの人物が、基本的に今の時代まで優勢であつたと、私は個人的に思います。多くの他の民族についても言うことができますが、今は時間がありません。

そしてもちろん、ペルシヤ帝国においても、様々な宗教があつたでしょう。そして各宗教グループやカルト、異端にはそれぞれ特定の支配者がいたでしょう。

さて、神の御使いは、ダニエルのもとへ行くのを反対するサタンの使いの集団全体によって妨げられました。しかし、ミカエルが来て打ち破り、御使いのメッセージが届けられましたが、その御使いはダニエルに言いました。「私が帰る時、何が起こるかをあなたにお教えしましょう。」では、ダニエル10:20を見てみましょう。

「そこで、彼は言った。『私が、なぜあなたのところに来たかを知っているか。今は、ペルシャの君と戦うために帰って行く。』」

つまり、ペルシャの君との戦いはまだ終わっていないのです。ペルシャの君がそれに対処する時、ペルシャ帝国に何が起こりますか。十中八九、崩壊で、それは後に起こります。しかし、それが最後の帝国ではありません。ですから、御使いは言っています。

「『私が出かけると、見よ、ギリシャの君がやって来る。』」

サタンの支配の次なる主要な帝国です。アレクサンダー大王のもと、ギリシャ帝国はペルシャ王国を完全に打ち負かし、地上の相当な領域の支配権を掌握しました。そして、アレクサンダーは、軍事的征服の偉業の一つとされる、地中海の南岸地方も含む、西はギリシャから東はインドまでを10年征服しました。しかし、もう一人いました。彼の背後に「君」がいたのです。私は、人間の歴史の中で最も主要な出来事は「背後の君」という言葉でのみ完全に説明されるのではないかと思います。

そして御使いはこう言います。21節です。

「しかし、真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう。」

言い換えると、私はまさに、あなたに神のこぼしを知らせに来た、です。そして、次の11章にそれが書かれていますが、21節の続きから11章にかけてこう言っています。

「あなたがたの君ミカエルのほかには、私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者はひとりもない。
——私はメディア人ダリヨスの元年に、彼を強くし、彼を力づけるために立ち上がった。——」

ダリヨスは、メド・ペルシャの最初の統治者で、バビロン帝国を倒して侵攻し、その場所を奪いました。ダリヨスと、そのあとのクロスは、ユダヤ民族が自分たちの土地へ戻り始める道を開きました。ですから、ある意味、ダリヨスによるバビロン打倒は神の目的における主な霊的勝利なのです。御使いが言っていることは、自分がダリヨスを力づけるのだということです。

また、人間の支配者と人間の指揮官は自分たちだけでは動きません。彼らの背後に、神の御使いとサタンの使いとの見えない力があります。神の御使いたちはそれらの支配者たちを強め、地上で神の目的を前進させる人で、サタンの使いは、それらの人たちに抵抗します。それこそが、なぜクリスチャンが自分の国の支配者たちのために祈るべきかという非常に大きな理由です。可能であるなら、クリスチャンはサタンの使いの活動を阻止し、神の御使いの活動を解放させなければなりません。

しかし、忘れてはならないのは、この特定の状況において、ダニエルが祈るまでは何も起こらなかったということです。この啓示以上に私たちが祈ることにチャレンジするものはないと思います。それはまるで、奇妙に思えるかもしれませ

んが、ダニエルの祈りは、打ち破りのために神の御使いを遣わした力の一つでした。みなさんは、あなたの祈りができることの可能性を過小評価してきたかもしれません。

そして、ルシファーという存在から落ちたサタンは、空中で自分の敵対する反抗的王国を作り、反抗的な御使いたちの軍勢を支配します。サタンと、彼とともにいる者たちを表現しているキーワードは、反抗です。神に対する反抗です。

さて、サタンも地上の彼の王国、下層階級を持っています。そしてまた、地上でサタンが支配するものを表わすキーワードは反抗者です。これは、エペソ2章ではっきりします。今お話ししているのは、空中のサタンの王国ではなく、地上で支配する者たちについてです。エペソ 2:1、2 のことばは、クリスチャンに向けて言われています。

「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」

不従順の子らとは、何を表わしていますか。そう、反抗者です。神に反抗する者はみな、自動的にサタンのコントロールのもとに来るのです。お分かりですか。教会に行って聖歌を歌うだけでは十分ではありません。あなたは、神への反抗を捨て、イエスに従わなければなりません。その時にこそ、変化が訪れるのです。教会に通う多くの人たちは、今もなお反抗者です。実際にサタンにコントロールされている反抗者です。パウロは3節でこう続けています。

「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い……」

みなさんの中でこれに同意しない人はいますか。私は確かに一つのことを知っています。私が主を見いだす以前、自分はどこにいたのかについて、疑いの余地がありません。私は反抗者で、反逆の王国にいました。私はそれを知りませんでした。私は、自分がとても賢く、成功者だと考えていました。私はあらゆることへの答えをすべて持っていると思っていました。私が聖書を読み始めるまで……そして、そうではないと私は気づいたのです。それを詳しく話す時間はありませんが、パウロは言いました。

「私、パウロを含む私たち使徒はみな、自分では理解していなかった霊的力を通してサタンによって、操られていた反抗者の部類にいました。誰が裏で糸を操作していたのか知りませんでした。私たちは操られるまま動いていただけでした。『私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い』ました。」

肉の欲だけではなく、私たちが明け渡すまで、私たちの思いは神から離れており、神への憎しみを持っています。知識人は、最も激しい神の敵であることがあります。そして、パウロは言います。

「ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」

これこそが、サタンの王国の下層級の説明です。地上の人類です。人種や宗派に関係なく、すべての人間は反抗します。神が任命された統治者であるイエス・キリストに心から従わない限り、人間は反抗者で、サタンは霊的力によって人々をコントロールするのです。

さて、非常に興味深いフレーズがあります。パウロは、「空中の権威を持つ支配者」と言っています。詳しくお話する時間はありませんが、空中(空)というギリシャ語の単語は、主に2つあります。一つは、英語の air のもととなった *aer* で、もう一つは溶剤、エーテルのもととなった *aither* です。私たちは元の単語に関して考えるのではありませんが、事実、*aer* は地表に接触する低空で、*aither* は、より高い、薄い空気です。ここで使われているのはどちらの語だと思いますか。低空です。つまり、サタンは地表を支配しています。そこが彼の領域です。多くの興味深い考察があります。それは、イエスが来られるとき、私たちは空中でイエスに会うために引き上げられると言っています。どちらの空中でしょう。低空です。すべてを話す時間はありません。それについて様々な理論を立てることができるかもしれませんが、私たちは、それについて自分を抑制しましょう。

ヨブ記41章で、おそらくあなたが気づかなかったサタンの注目に値する一つのイメージをお話ししましょう。この章全体は、海の巨獣の一種のレビヤタンという被造物を取り扱っています。私たちはレビヤタンについてあまり知りませんが、非常に無駄のない聖書が、一つの海の巨獣だけのために34節を費やすと思いますか。実は、レビヤタンはサタンの典型、あるいはイメージです。注意深くこれについて学ぶと、理解することができます。最後の節のことばからだけ、お話ししたいと思います。ヨブ 41:34 です。

「それは、すべて高いものを見おろし、それは、すべての誇り高い獣の王である。」

それがサタンです。高ぶりが人間の心に入るのは、神に反抗するサタンが原因となった影響なのです。高ぶりは、私たちをサタンのコントロールのもとにもたらしめます。ペンテコステ派であるとか、バプテスト派であるとか、カトリックであるとかは、関係ありません。問題は、神に対する私たちの心の態度がどうであるかなのです。そして、私たちがイエス・キリストを通して心から神に従い、神に明け渡す心を持たない限り、あらゆる立派な宗教的用語を用い、あらゆる肩書きを誇ることができますが、実際には、私たちはレビヤタンの王国のもとにいるのです。なぜなら、レビヤタンはすべての高ぶりの子たちの王だからです。

あなたは、高ぶりに反するメッセージを何度くらい聞きましたか。答える必要はありません。基本的に、今日の教会は、重要でないことが主流になっていると思います。何年も前、私が牧師であった時、人々の喫煙について厳しく対処しました。ひどいものでした。問題は、当時喫煙をしていた教会員はいなかったことです。しかし、妻と喧嘩をした人々については何も言わなかったのです。そして、一人の青年に、喫煙をしているということで教会員になれませんか私が出したことを、私は偽善者のようだと感じました。そして私は、夫や妻に対する態度や関係がかなり間違っている教会員たちがいると知りました。喫煙や飲酒、酩酊などのようなものは、単に小さな小枝です。しかし、その根は何かわかりますか。反抗です。そして、マタイの福音書の福音の導入で、バプテスマのヨハネは言っています。

「斧もすでに木の根元に置かれています。」

それこそが、私たちの目標とするところです。

最後にサタンの野心、目的を少し要約しましょう。サタンには、非常に確かな目的があります。主に2つの野心を持っています。全人類を支配すること。エペソ 6:12 で使われているフレーズの一つを思い出しましょう。「この暗やみの世界の支配者たち。」そして、サタンの2つ目の目的は、礼拝を受けることです。私たちはこれを理解する必要があります。ご存知のように、サタンは神と等しいと権利を主張しましたが、失格とされました。しかし、その権利をあきらめなかったのです。そして、サタンがその権利をなおも主張できる方法が一つあります。何でしょうか。礼拝を受けることです。なぜなら、礼拝は神にのみなされるべきだからです。ですから、サタンは礼拝されるときはいつも、「ほら、私はまだ神だ。」と言っているのです。あなたがサタンのすることをすべて分析するなら、サタンの究極的な目的は、全人類から礼拝を受けることなのです。そして、預言的観点からの私の判断では、サタンのその野心の達成に非常に近づいていると思います。

サタンと空中の彼の使いたちは、異教の神々であったと思います。すべての異教社会と異教の民族によって礼拝される神々は、サタンとその使いたちの単なる描写方法の違いだけです。ゼウス、ヘルメス、ポセイドンなど、あらゆるギリシャの神々は、単にサタンの異なる階級です。そして、人類のあらゆる文化を見渡すと、様々な呼称がありますが、同じ存在であるとわかります。人々が礼拝する時、何を礼拝するのですか。サタンとその使いたちです。

そして、墮落した人がサタンの王国につながらざるを得ない特定の道があります。一般的な言葉では、魔術で、様々なかたちであらゆる異教社会で行なわれています。呪術医と呼ばれる人に出会うことなく、何らかの異教の背景を持つ民族のところへ行くことはほとんど不可能です。様々な言語でいろんな呼び方がありますが、同じものです。ある意味、呪術医はサタンの祭司です。呪術医こそ、人々をサタンの王国に接触させることができる人なのです。彼はなぜそうしたいのでしょうか。理由は主に2つです。第一に、呪術医は、サタンが彼らにもたらそうとする災いをあまりにも恐れているからです。そして、彼らのいけにえと儀式のほとんどは、その非常に冷酷で気まぐれな存在をなだめるためなのです。そして、第二の理由は、彼らは力が欲しいため、魔術は力の手段なのです。私は海外の宣教地で宣教師たちに言います。アフリカやインドに行って、現地の人たちにサタンは非現実的だと話さないでください、と。現地の人々はみな、サタンは現実だと知っています。悪霊は現実です。彼らはサタン、悪霊をよく知っています。あなたが彼らに話さなければならないのは、悪霊は現実で、イエスも現実で、イエスは悪霊を打ち破ったということです。そして、イエスは私たちにそれらを倒す力を与えてくださいます。ですから、最終的に、宗教的行為としての魔術は、人間の神への反抗の現れです。魔術は、墮落した人間の自然宗教で、それは全人類に浸透しています。それは、何か奇妙なものや、異常なものではありません。

そして、最後に私が言いたいことは、現在の私たちに重要なことで、魔術は必ず戻ってくるということです。それは、キリスト教が入って来た地域のように、サタンの存在は押し出されますが、決して完全に打ち負かされませんでした。そして今、サタンは言うのです。「さあ、われらの番だ。私たちは戻ってこよう。」